

【シンポジウム報告】

# 社会科授業研究においてキーコンピテンシーをどうとらえるか

(2015年2月21日開催)

關 浩 和

(兵庫教育大学)

## 1 シンポジウムの趣旨

OECD (経済協力開発機構) の DeSeCo (コンピテンシーの定義と選択: その理論的・概念的基礎) プロジェクトにおいてまとめられたのが、キーコンピテンシーである。キーコンピテンシーとは、①相互作用的に道具を用いる力②異質な集団で交流する力③自律的に活動する力に集約される。コンピテンシーとは、単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力である。さらに、キーコンピテンシーとは、日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、人生の成功や社会の発展にとって有益、さまざまな文脈の中でも重要な要求(課題)に対応するために必要、特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要といった性質をもつとして選択されたものである。これは、能力開発と生涯学習に関連する充実した国際評価・指標システムと、さらに効果的な政府施策のための長期的視野へ展開する潜在的な可能性を与えるとされている。最も基本的なレベルにおいて、生きるということは自ら行動すること、道具を用いること、他者と交流することを伴う。現代生活が要求しているのは、行動するだけでは十分ではなく、精神的複雑さ(反省性)の中で、思慮深く、責任をもって、自律的に行動できなければならないとされている。その背景には、「変化」、「複雑性」、「相互依存」に特徴づけられる世界への対応の必要性がある。このような状況を踏まえ、本シンポジウムでは、社会科授業研究において、キーコンピテンシーをどう捉えるかをテーマに掲げ、各シンポジストの提案を手がかりに議論の場を設定した。

## 2 シンポジウムの登壇者

### ①シンポジスト

社会科から見たキーコンピテンシーの批判的検討  
国立教育政策研究所 大杉 昭英  
小学校社会科授業におけるキーコンピテンシー  
と授業づくり

大阪教育大学 馬野 範雄

キーコンピテンシーの三つのカテゴリーと評価  
法—自律的な活動に着目して—

北海道教育大学 坂井 誠亮

### ②指定討論者

広島大学 草原 和博

### ③コーディネーター

兵庫教育大学 關 浩和

## 3 シンポジウムの概要

### (1) 大杉昭英氏の提案

大杉氏は、キーコンピテンシーベースのカリキュラム編成の在り方を述べられる。

カリキュラム編成は、内容(何を教えるのか)・知識を決めて、それに応じて思考力・判断力・表現力といった能力を考えていこうとするのが通常のコンテンツベースのカリキュラム編成であるが、コンピテンシーベースは、このような能力を育てるために、必要な内容、知識を選択して配列していく発想のカリキュラム編成である。

大杉氏は、なぜ、このようなカリキュラム編成の必要があるのかについて、社会的視点(心理学者デビッド・マクレランドの研究)や教育行政的視点(学習成果 learning outcome の指標や教育制度、教育政策、教育活動の評価等)から、なぜ、コンピテンシー概念が注目されているのかを述べられ、キーコンピテンシーを育てるための基本的性格を述べられる。

### ①ホリスティック・アプローチ

キーコンピテンシーは、三つのカテゴリーとそれぞれに属するいくつかの具体的な能力で構成しているが、それらの能力は、ある特定の文脈における要求に対して、統合的に働くホリスティックなものでなければならない。

## ②現実社会の中で働くもの

キーコンピテンシーのような能力は、思考しコミュニケーションする必然性のある文脈において、共同的で深い学習（真正の学習：オーセンティック・ラーニング）に取り組む中でこそ育てられるものである。つまり、キーコンピテンシーは、実生活や実社会でその力が発揮され育っていくものである。さらに、キーコンピテンシー育成に関わる社会科について、三つのレベルで述べられる。

### ①カリキュラムレベル（ラーニング・アウトカム）

カリキュラム設計は、パフォーマンス課題を設計してその課題を遂行する児童生徒の姿（学習成果）を想定し、その系統を作り上げていくこと。

### ②学習指導レベル（オーセンティック・ラーニング）

実生活のリアルな文脈や趣味・文化、あるいは歴史上の真理をリアルな文脈の中で生じている問題状況に身を置き問題解決を行うためのパフォーマンス課題を設定し追究させること。

### ③評価レベル（オーセンティック・アセスメント）

能力を発揮する必然性のある場面で為される学習者の振る舞いを手がかりに、概念理解の深さや知識・技能の総合的な活用力を質的に評価するパフォーマンス評価が必要であること。

## (2) 馬野範雄氏の提案

馬野氏は、これまでの収束型の授業から、子どもが主体となる探究型の授業にしていくために、キーコンピテンシーの考えを社会科授業の場の構成に置き換えて述べられる。

### ①自律的に活動する場の構成

社会科授業は、調べる活動やまとめる活動を重視してきたが、観点別評価の「観察・資料活用の技能」の育成に重点が置かれている。しかし、キーコンピテンシーとして求められているのは技能面だけではなく、「社会的な思考・判断・表現」の力である。そのために、社会的事象の事実を捉え、自分はその社会的事象をどう考えるのかという自律的に活動する場を設定することが重要である。

### ②協働性を高める交流活動の場の構成

社会科授業は、発表や話し合い活動を重視してきたが、社会を得意とする一部の子どもの活躍が目立っていたことも否定できない。子どもの発表を深めていくために、指導者は発表の内容を羅列していくのではなく、子どもの意見を類型化しながら、構造化していく力量が必要である。また、子どもは、自分は何の立場から意見を言っているのか、立場を意識した発表を求めていく必要がある。交流の場では、子どもの意見を「位置づけ」、「意味づけ」、「関連づけ」、「価値づけ」していく場の構成が必要である。

### ③子どもの活用力を育てる評価と指導の一体化

評価と指導の一体化として指導者の役割や指導法を究明していく必要がある。学習の振り返りを記述させ、本時の課題に対する自分の考えを書かせ、その評価を次の授業につなげていくことが必要である。第6学年単元「豊田秀吉の政治」を具体的な事例として取り上げ、①課題追究における事実把握②課題追究における意味追究③意味追究における教師の役割（位置づけ・意味づけ・関連づけ・価値づけ）④パフォーマンス評価を活用した形成的評価の在り方について述べられる。

## (3) 坂井誠亮氏の提案

坂井氏は、キーコンピテンシーの三つのカテゴリーについて、評価の観点から改善への可能性について述べられる。

### ①道具を相互作用的に活用する力

評価については、PISA 調査や全国学力状況調査B問題で見られる能力を問う問題や評価問題プランを例示される。

### ②異質な集団での交流する力

社会的論争問題における価値判断や意見交流に基づく合理的意思決定の授業が想定される。子どもの判断根拠の変容過程を評価していくことの重要性を述べられる。

### ③自律的に活動する力

グローバルな見方・考え方や、プロジェクトによる社会参画の授業が想定される。プロジェクトを遂行する上で、その過程での見通しと振り返りをメタ認知させていく。この能力の発達により、個人は個人的な権利および集団的な権利を主張し、

自らの人生に対してより大きなコントロールができるようになることが必要であること。

キーコンピテンシー育成には、社会科における価値探究過程や社会参画、プロジェクト型の授業、メタ認知、パフォーマンス評価、自己評価を重視しなければならない。でも、決して新しい資質・能力とその評価法を提案している訳ではない。キーコンピテンシーは、道徳の内容と関連している。しかし、今日の道徳教育で行われている安易な価値注入では身につかない能力である。社会科の概念探究から価値分析を含む社会科の指導と評価を丁寧に実践することにより、育成可能な資質・能力である。今後の課題として、社会科の関心・意欲・態度を含めて、子どものパフォーマンス評価やルーブリック研究の必要性を述べられる。

#### (4) 指定討論者の論点整理

指定討論者の草原和博氏から、キーコンピテンシーは、劇薬的な要素を含んでおり、社会科の存続に関わってくる。学校現場が、ジムになり、身体能力が高まるためのアクティブ・ラーニングで、特定の部位を鍛えるような学習が標準になってしまうことや、能力育成や内容を総合的に捉えることが重視されてくると、教科観の意味がなくなり、社会科を取ってする必要性があるのかという問題を指摘され、以下の論点が示される。

- ①コンピテンシー論と社会科教育研究の関係は、どの立場（従属・対等・活用）による提案なのか。
- ②コンピテンシー論は、コンテンツ・フリーになる可能性があるが、社会科の基礎・基本、ミニマムなものとして位置づける根拠は何か。
- ③コンピテンシー論は、格差の助長、形式主義、活動主義に特化されて、教科論そのものが確立しなくなる危険性があるのではないか。

#### (5) 議論の内容

指定討論者の質問に対して、各シンポジストが意見を述べられる。

馬野氏は、コンピテンシーを活用する立場で述べられる。コンピテンシー論を取り入れることで授業改善を図りたい。コンピテンシーは、社会科においては資料活用能力であり、単なるリテラシーではない。資質・能力面を含んだ総合的な能力で

ある。キーコンピテンシーが示してる学力には、内容面の知識・理解はない。方法的な側面で社会科に、総合的に取り入れていくべきで、コンテンツ・フリーにはならない。社会科には、社会科固有の内容がある。

坂井氏もコンピテンシーを活用する立場で述べられる。社会科の内容は、現代社会を考える上で必要である。社会科の内容を踏まえた上で、自分はどのように考えるのが大切である。社会科は、教え込みの授業が横行している。だから、子どもが自分事として捉えさせるためにキーコンピテンシーを取り入れていくべきである。

大杉氏は、従属もしないし、活用する立場でもない。対等の立場で述べられる。コンピテンシー論を纯粹に受け止めたら、社会科はなくてもよい。しかし、社会科固有のものとしてコンテンツを受け止めなくてはならない。大切なのは、知識を道具として使っていくことである。コンテンツ・フリーではなくて、解釈フリーになる。

以下、フロアからの主な意見を取り上げておく。

- 社会科は、知識をどう用いるのかということをも明確に打ち出して、知識を教えるための枠組みがなければ存続の可能性はないのではないか。
- 現実社会を見た時に、社会科がなくなっはいけない。社会科としてどうしても子どもに知っておいてほしい知識・内容がある。
- 小学校でやっている授業は、キーコンピテンシーを受け入れやすいが、本実践発表は、これまでと変わりのない授業提案になっている。また、初等・中等教育で違いはあるのか。
- 教える授業から学ぶ授業へというのはこれまでと言われてきたが、キーコンピテンシーを取り入れることで、変わってくる可能性がある。
- キーコンピテンシーを捉えるレベルが違っているので、議論が焦点化されていない。やはり、具体的な授業レベルを取り上げて、どのような意義があるのかを論じるべきである。
- キーコンピテンシーが求めるのは、汎用的学力である。教科固有の学力とは違う。それを考えると知識内容が明示されていない実践が横行している初等社会科は、危機ではないか。これらの意見を受けて、本シンポジウムの登壇

者が総括を行う。

坂井氏は、社会科でキーコンピテンシーの考え方が大事なのに、社会科はどんどん離れている。それは、評価が授業をつくっている状況があるからである。PISA 調査や学力状況調査の問題もそうだが、点数が取れる国語科や算数科に流れて、社会科は離れてしまっている。社会科だからこそ、キーコンピテンシーを大事にしなければならない。

馬野氏は、探究型の授業や探究学習とよく言われるが、事実把握から価値判断に至るまでをどれだけ子どもの主体性や協働性をもって、実践されてきたのか疑問である。社会科のテストでも、思考力・判断力と言いながら、ただ覚えていたら書ける問題、ただ文章記述をすれば思考力を問う問題のイメージがある。事実把握をベースに、授業では、見えないことを見える化していく、自分の考えを記述、パフォーマンスしてみる。その起爆剤と成り得るのがキーコンピテンシーである。

大杉氏は、キーコンピテンシーは、汎用能力で、どの教科でもやる能力である。社会科としてどのようにするかを考えないといけない。知識を消費者としてどう使うのか、道具である知識をどう使うのが社会科で重要なことである。特定の分野で何ができるのかを考えないといけない。

最後に、指定討論者の草原氏が総括をされる。

今回の発表は、キーコンピテンシーを捉えるレベルがそれぞれ違っていたことで論点がかみ合わなかった部分がある。コンテンツ・フリーになるのかと提起したが、コンテンツ・フリー自体も多義的である。学ぶ内容として学習対象のフリー、子どもが解釈していく解釈内容のフリー、解釈していく道具としての視点や方法のフリーという三点がある。また、社会科教育研究は、授業レベルで考えることが大切である。馬野氏の事例では、なぜ、秀吉なのか。そこを議論すべきである。例えば、全国を平定した人物として秀吉を取り上げると、主権者として為政者の政策を判断して評価することができる。キーコンピテンシーを視点にすれば、秀吉を分野別（外交や内政、経済、福祉、文化交流など）に評価票をつくり、各自で採点をする。それぞれの分野について、記述評価することで、結果として、社会科の目標が達成できるよ

うな社会科の授業モデルになり得るのではないか。

#### 4 議論の成果と課題

本シンポジウムを終えて、議論の成果と今後の課題をあげておく。

- キーコンピテンシーを視野に入れると、社会科授業は、現実生活や現代社会に活かされる能力が育成されなければならない。
  - キーコンピテンシー育成に関わる社会科授業は、次の三つのレベルで考えなければならない。
    - ①カリキュラムレベル learning outcome
    - ②学習指導レベル authentic learning
    - ③評価レベル authentic assessment
  - キーコンピテンシーは、社会科授業を教師が教える授業から子どもが学ぶ授業に転換するための起爆剤と成り得る可能性がある。
  - 社会科は、コンテンツ・フリーにはならない。社会科固有の知識が現代社会を生きていくためには必要であり、そこに社会科の存在意義がある。どのような知識をどのような問題に適用して考えることができるのか、適用可能な分野を示すとともに、その分野に関わる知識内容を明示し、その枠組みを提示することが必要である。
  - プロジェクト型の授業が社会科にも求められているが、道徳が教科化され、ますます社会科との峻別が必要になってくる状況の中で、評価の観点、比重、方法も変えていかなければならない。異質な集団で交流する力や自律的に活動する力などの汎用的能力を社会科でどう位置づけていくのがポイントである。
  - 社会科授業では、リフレクションの場が必要である。この授業を終えて、自分はどう考えたのか、自己評価（メタ評価）をしたり、自己分析をしたりすることが必要である。また、関心・意欲・態度をどう評価するのか、パフォーマンス評価の研究や単元や授業レベルでの評価基準、ルーブリック作成の積み上げが必要である。
- 以上、本シンポジウムは、社会科授業研究において、キーコンピテンシーをどう捉えるかについて議論された。ここで語られた論点をそれぞれの研究者や実践者が受け止め、今後さらに、教育活動の場で深めていくことが大事である。